

飯山市における空き家移住者と地域社会のかかわり

富田 厚志

本稿では、長野県飯山市における空き家の現状について考察し、そのうえで空き家への移住者を中心に移住要因や地域社会へのかかわりについて聞き取り調査を通じて明らかにした。

飯山市では空き家の増加が進行している状況であるが、市が行っている他県出身者を対象とした移住セミナーなどの取り組みで山間部の岡山地区を中心に県外からの移住者が多数流入している。今回聞き取りを行った移住者の多くは、自然豊かな環境への憧れ、仕事の関係での移住、事業立ち上げが主な移住要因であった。移住者の多くは地域の労働活動や行事などに参加して地元住民と良好なかかわりを築いている。行政による移住者誘致の取り組みやライフスタイルの多様化により、移住者が増え、少子高齢化が進行している地域社会の新たな活力として期待されている。ただ、「区費」を巡る課題など移住者と地元住民の考え方の違いがみられる点もある。移住者側の価値観と既存住民側の価値観を互いに尊重して地域社会をともに支えていくという姿勢が求められている。

キーワード：空き家、移住者、地域社会、飯山市

I はじめに

I-1 研究背景・研究目的

今日の我が国においては、人口が減少し高齢者の割合が増えている現状があり、それに伴い多くの課題が生じている。なかでも空き家の発生は大都市圏や地方都市、そして農山漁村地域において共通の問題となっている。その多くは単身世帯の家主が死去あるいは居住者が退去していくことなどにより生じるものであり、後継の居住者がいないことで空き家化していくものである。ひとくちに空き家と言っても、管理者がいる空き家とない空き家が存在しており、後者であると老朽化が進行し、倒壊の危険性が大きくなり、地域の景観に影響が生じるおそれがある（牧野 2014）。

地理学の分野においても空き家の発生については議論がなされており、空き家が放置されがちな理由として、地価の下落、高額になる解体費用、家屋を取り壊して更地にする固定資産税・都市計画税の軽減措置がなくなるという経済的な

問題、関係者間の合意形成の難しさなどがあげられている（川口 2016）。また、空き家の増加によりコミュニティ維持の担い手が減少していくことで、自治体が空き家の入居促進に取り組まざるを得なくなっていること（由井ほか 2014）が指摘されている。この問題については、気候や丘陵地、山地といった自然条件や社会的条件、心理的条件の要素が影響しあう総合的な現象として、地域性を踏まえて検討する必要性（益田・久保 2015）や、その管理において自治体、民間、地域コミュニティ、NPOなどの連携を図る中立的組織が求められるとする提言もある（西山・久保 2015）。

人口減少・少子高齢化の傾向が著しい農山漁村では空き家対策の一つとして、他地域からの移住、特に都市部から生まれ育った地方へと戻る「Uターン」や出身地でない地方へと移住する「Iターン」希望者をターゲットとした既存の住宅への入居をあげることができる。地理学や社会学、都市計画などの分野ではこうした都市部から地方への移住者に着目した研究が多数ある。その

アプローチについては、移住者に聞き取り調査を行い、自由な語りから移住要因といった特性を明らかにし、その後の生活における地域社会との関わりを検討したもの（谷川 2004）、特定の不動産業者を通じてIターンした移住者の地域への受容のされ方、地元住民との相互認識について考察したもの（竹下 2006）、移住者の地元住民との交流や自治会参加への有無とその理由などについて調査した報告（新里・武田 2015）、空き家の管理状況とともに地元住民のU・Iターンへの活用に対する意向を調査した報告（岩見ほか 2015）などがある。さらには、広域的なアンケート調査を行い、都市部からの人口移動の動向や行政が行う定住政策への課題を検討したものもみられる（北山ほか 2010、山岡ほか 2011）。

こうした空き家や移住に関する研究に関して、移住者と地域のかかわりやその管理状況などについて求めた研究は多数あるが、行政の取り組みの成果と移住者の意思決定、そして地域社会における活動及び地域住民との関わりにおける摩擦といった課題を体系的に検討したものはみられない。ライフスタイルの多様化、これからの少子高齢化が進んでいる状況において行政の取り組みと移住者の特性、さらには地域社会の受容について包括して考察していく必要があるといえる。また、既存文献には山間地域について取り上げた研究が比較的少なく、移住に関するこの地域固有の特徴についても注目していく必要がある。本稿ではこれらの視点に着目して検討していくことを課題とする。

I-2 研究方法

本研究ではまず、飯山市において危険空き家の発生している状況及びその対策について、市の調査結果や移住に関する取り組みからその現状について述べる。

次いで、長野県外から飯山市に移住したIターン者や、長野県内出身者であるが新たに市内の空き家を購入して居住しているUターン者への聞き取り調査から、移住者の移住における意思決定及

びその傾向について検討する。

次いで、移住者と長きにわたって生活を送る既存住民が協働する地域社会について、移住者もたらす可能性と両者が協働していく際の課題について考察を行い、最後にまとめの章とする。

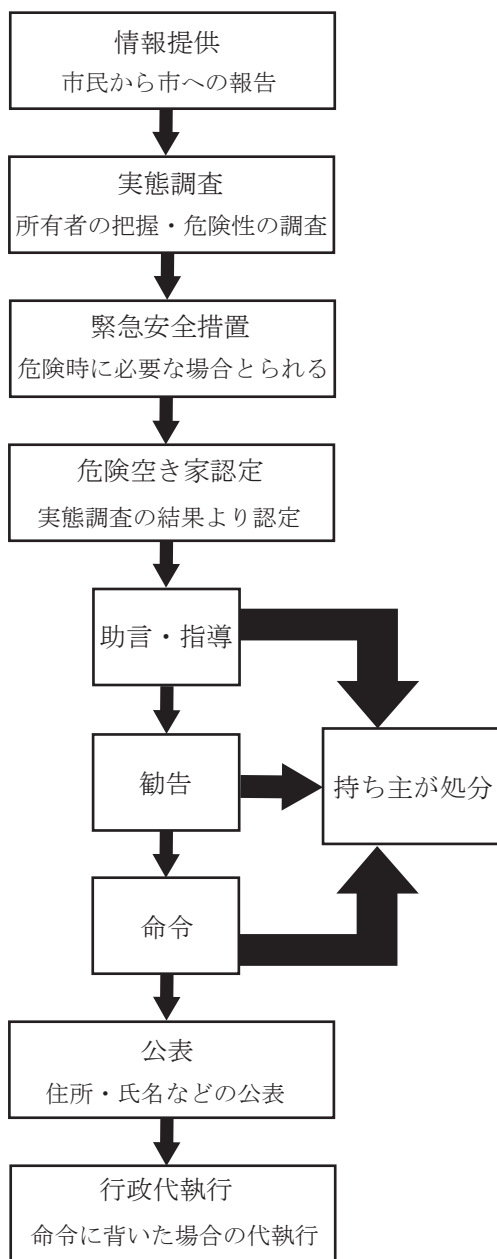
II 飯山市の空き家対策と移住推進

II-1 危険空き家対策

飯山市では、増加をたどる空き家についてその対策を進めている。2012年4月に「飯山市空き家等の適正管理に対する条例」が制定され、10月に施行された。長野県内の市町村では小谷村と並んで初めての制定であった。施行後は市が市民に情報提供を呼び掛けて、その情報提供によって空き家に関する情報を集めていくことになった。第1図では、危険空き家の存在を把握した市の対応措置について示している。住民から情報提供を受けた市は、それらの空き家について所有者の把握や危険性について建築士に依頼し調査を行う。危険性が十分であると認められた場合、さらに所定の認定基準に基づいて「実態調査」が行われる。これによって一定の基準を満たした場合、「危険空き家」と認定され、市が所有者に改善措置を施すように「助言・指導」を行う。これで改善が見られない場合さらに厳しい対応が行われる。ただ、飯山市ではこれまで持ち主が「勧告」に対応せずに市が「命令」を出した例や空き家所有者が「公表」された例、そして「行政代執行」で強制的に空き家を取り壊された事例はなく、「勧告」までの段階で所有者が空き家を処分したという。

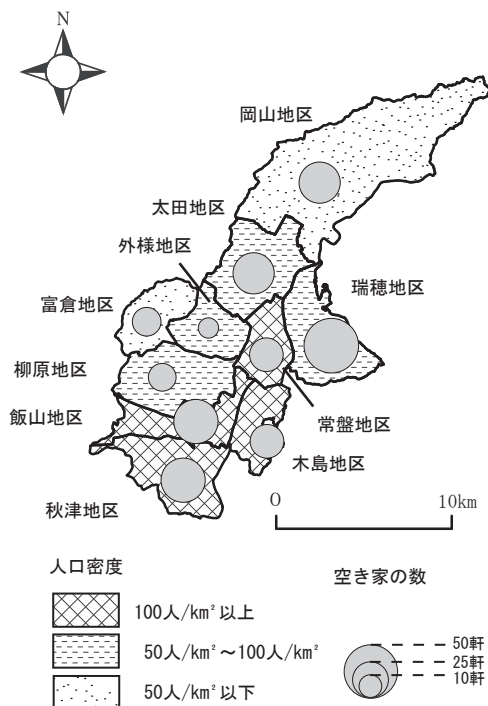
この条例が施行されてから2015年6月までに市民から空き家に関する情報は39件寄せられ、そのうち38件において危険空き家の認定基準に基づいて調査が行われた。その結果、25件の家屋が「危険空き家」と認定され、11件はすでに取り壊された。

2014年11月には空き家等対策の推進に関する特別措置法が成立、2015年5月に完全施行された。これに伴って飯山市では市内の空き家を地区ごと



第1図 危険空き家の認定とその後の対応
(飯山市の資料により作成)

に一齐に把握する調査を実施した。その結果市内合計で282軒の空き家が存在することが確認された。第2図では、この調査で分かった飯山市の地区別の危険空き家数及び各地区の人口密度を示し



第2図 飯山市の地区別危険空き家数と人口密度
注) 危険な空き家数は2015年のデータ、人口密度は2016年9月現在のものである。

(飯山市の資料により作成)

ている。市の中心部で最も人口の多い飯山地区、それに隣接し、ロードサイド型の土地利用が進行している秋津地区、また農山村地域にあたる太田地区や瑞穂地区、そして岡山地区でも空き家数が比較的多い。この結果に基づき、飯山市では住民に空き家に関する情報提供を呼び掛けていくことになり、同年10月の段階でこのうち37件の空き家に関して情報提供を求める呼びかけを行い、24件から回答を得られたという。これらの空き家については、その危険性について順次調査が行われていくものと思われる。

飯山市における空き家対策は都市地域、農山村地域問わず市全域における重要な課題であるといえる。写真1に示す景観にも影響を及ぼすような放置された空き家が、今後増えていくおそれがある。



写真1 飯山市蓮地区の空き家
(2015年10月 富田撮影)

II-2 空き家等などへの移住定住推進事業

1) 空き家バンク制度

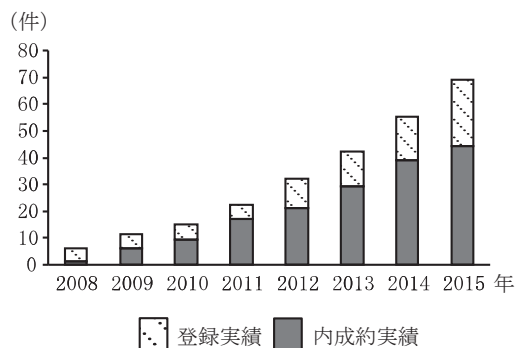
空き家バンク制度とは、自治体などが地元の空き家や移住に関する情報をインターネット上で公開することによって、全国から入居者や購入者を募る取り組みである。この制度の実施には、自治体外から住民を取り込んで定住者を増やし、地域活性化につなげていくねらいがある（米山2012）。飯山市では2008年から行っており、移住定住推進課が地元不動産事業者と協力して市内の空き家や土地、賃貸物件などについて、移住や住宅建設などを検討している利用希望者に広く情報を提供してきた。この制度は市内の空き家や土地などを所有し、売買や賃貸を希望する所有者が市の窓口あるいは不動産事業者から情報の登録を行う。その情報は、課が窓口となっている「飯山市ふるさと回帰支援センター」の「空き家バンク」のリストに登録され、窓口やウェブサイトを利用希望者が情報を閲覧することができる。

また、これらの物件は長野県と一般社団法人長野県宅地建物取引業協会が共同で運営している「楽園信州空き家バンク」というポータルサイトにも登録される。こちらは長野県内の各市町村の空き家バンクに関する情報が掲載されており、長野県への移住検討者も幅広く飯山市の空き家バンクの情報に目を通していくことができる。飯山市の移住定住推進課には「楽園信州空き家バンク」

のサイトを見た人からの問い合わせが多く、より多くの移住希望者に空き家などの情報を見てもらえることが「空き家バンク」登録のメリットであるといえる。第3図では、飯山市の空き家について、空き家バンク制度を通じて登録され、また売買が成約した家屋の件数を示している。2015年10月までに69件の空き家が登録され、このうち44件について売買契約が成立している。

2) 移住説明セミナー

飯山市では2010年ごろから東京など都市部で移住を検討している人を対象に「北信州いいやまふるさと暮らしセミナー」を行っている。移住希望者に向けてこの地域での生活について知ってもらおうというねらいで行われているものである。このセミナーは2時間ほどで行われ、前半では飯山市に関する概要や地方での近所づきあい、あいさつ、不動産に関する情報について市の担当者が説明を行う。後半では、飯山市外から移住した人による移住体験談の講演が行われる。ここでは移住を決めたきっかけ、飯山市での住まいや仕事を探した経緯、地域とのかかわり、購入した住宅の改修などについての体験談などが語られる。参加者の年齢層は回によって変わるが、30代から80代、働き盛りの世代からリタイア後の世代まで幅広く参加している。



第3図 飯山市空き家バンク売買実績
(2008年～2015年10月)

注) 家屋の売買について記載した。

(飯山市の資料により作成)

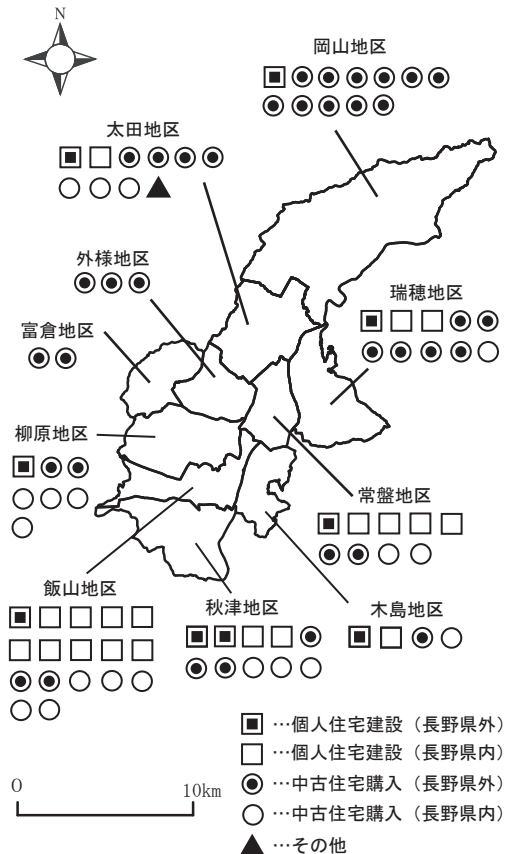
2015年度は東京、横浜、名古屋で計5回開催され、このうち東京ではNPO法人ふるさと回帰支援センターで行われた。

3) 移住・定住支援住宅建設促進事業

飯山市では、市外からの転入者で飯山市内に個人住宅を建設、あるいは中古住宅を購入・改修する場合に一定の補助を受けることができる。中古住宅である空き家への移住に絞って述べると、市外からの転入者または市外から転入し賃貸住宅に入居して3年以内であり、定住を目的として5年以上居住する予定である場合に購入費用及び改修費用の額の2分の1以内で補助を受けられる。ただし、補助を受けられる額には上限がありその額も転入者の年齢で変わってくる。

飯山市では、移住定住課で移住の相談や、セミナー参加、空き家バンク制度などの活用で住民票を移した人について移住実績としてカウントしている。

第4図では市の制度を利用して移住した人数を市内の地区ごとにまとめている。中心部の飯山地区では県内からの住宅建設で転居した人が多い一方、市の北部、特に山間部の岡山地区については長野県外から空き家など中古住宅を購入し移住している人が多いことがわかる。



第4図 飯山市の地区別移住者数 (2008年～2014年)

(飯山市の資料により作成)

Ⅲ 空き家移住者の意思決定要因

Ⅲ-1 空き家などへの移住者

本章では、空き家へ移住した人の意思決定について検討する。今回調査で聞き取りを行った移住者は13名であり、その特徴を第1表に示す。いずれも長野県外からのIターン者、あるいは長野県出身のUターン者であり、飯山市で空き家を購入し、生活の拠点を構えている(写真2)。聞き取りは2015年10月および2016年5月に実施した。その多くが2000年以降に移住した人であり、移住のきっかけはリタイアであったり、あるいは世帯主の強い希望が反映されたものとなっている。

今回聞き取り調査を行った多くの世帯は、市北



写真2 移住先の空き家例

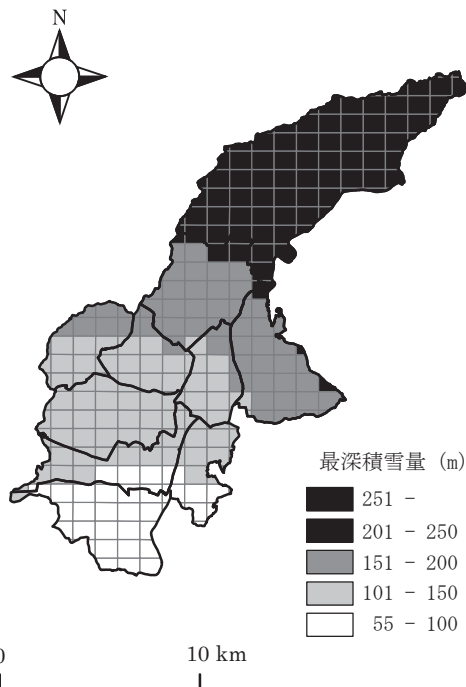
(2016年5月 富田撮影)

部の岡山地区に移住している。この岡山地区は、千曲川沿岸の低地部とそれより高い台地部に分かれており、それぞれに集落が点在する形となっている。また、この岡山地区は、第5図に示すように市内の中でも比較的積雪量が多い地域となっている。さらに同じ岡山地区内でも千曲川沿いの低地部と台地部で積雪量に差があり、多い時には積雪が4mを超すときもあるという。また、第4図でも示したように、岡山地区は県外からの移住者が多い地域となっている。ここでは岡山地区を中心とした農山村地域において、その移住への意思決定の要因を考察していく。

Ⅲ-2 移住を決めた理由と移住先での生活

今回聞き取りを行った移住者はそれぞれ地方での暮らしにあこがれを持ち、移住先での生活を充実させながら過ごしている。それぞれの移住のきっかけや移住先での生活形態について事例をもとに検討していく。各事例は第1表にまとめた。

【世帯A】：1998年ごろに移住。もともとはメディア関係の仕事をしており、仕事で「田舎暮らし」に関する番組制作に携わっていた。その仕事に長く携わるようになって自らも移住を決め、会社側の事情もあって定年より早くリタイアし、岡山地区にある民家を購入した。



第5図 飯山市における平均年最深積雪(2012年)
注) 1区画1km²で算出されたデータである。

(国土数値情報平年値メッシュデータより作成)

【世帯B】：2011年ごろに移住。以前は東京都に在住していたが、2008年ごろから野沢温泉村に年数回訪れるようになった。春には山菜取り、夏に

第1表 聞き取り対象者

世帯記号	世帯数	世帯構成	居住地区	移住前の居住地	移住した時期	移住類型
A	2	夫(60代), 妻	岡山	東京都	1998年ごろ	余暇満喫
B	5	夫(50代), 妻, 子ども3人	岡山	東京都	2011年ごろ	余暇満喫
C	2	夫(70代), 妻(50代)	豊田	東京都	2007年ごろ	余暇満喫
D	1	男性(70代)	岡山	埼玉県	2008年ごろ	余暇満喫
E	2	妻(60代), 夫	岡山	神奈川県	2009年ごろ	余暇満喫
F	2	夫(60代), 妻	瑞穂	東京都→長野市	1972年ごろ→2004年ごろ	独立事業
G	1	男性(70代)	瑞穂	飯山市→東京都	2001年ごろ	余暇満喫
H	3	夫(60代), 妻, 娘	岡山	長野市→東京都	2012年ごろ	余暇満喫
I	1	女性(50代)	岡山	東京都	2015年ごろ	余暇満喫
J	4	夫(40代), 妻, 子ども2人	柳原	愛知県→中野市	2013年ごろ	独立事業
K	1	男性(20代)	岡山	東京都	2014年ごろ	就業移住
L	4	夫(40代), 妻, 子ども2人	岡山	神奈川県	2014年ごろ	独立事業
M	1	女性(30代)	岡山	東京都	2009年ごろ	就業移住

注) 世帯構成にて太字で表記している人に聞き取りを行った。

(聞き取り調査により作成)

はカブトムシ取り、秋にはキノコ狩りで訪れ重ねていくうちに移住することを決断するようになった。購入先の民家は内部リフォームを行い、負担する費用が大きくなったという。仕事については、東京でも行っていた運送の仕事を行っている。またこの世帯では、市内の中心部の学校に通学する必要のある子どもがいたため、飯山市を南北に通るJR飯山線の沿線を希望していた。そのため岡山地区の飯山線の駅から歩いていける距離にある住宅に移住している。

【世帯C】：2007年ごろに移住。かつて夫がキャンピングカーで日本縦断の旅を行っており、その際に偶然現在の住居となる家を見つけたという。かつてこの家は芸能関係の仕事をしていた人の別荘として建てられたが、その人が1996年に死亡した後は着工を担当していた工務店が売りに出していた。自宅からは山地や太田、常盤地区を一望することができ、四季の変化をとらえていくことができることが魅力であるという。

【世帯D】：2008年に岡山地区の古民家を購入して移住。移住以前から新潟県の妙高や野沢温泉村方面にキノコ採りで訪れる機会があり、家族と離れ一人生活の拠点を移していくことを決めた。居住している岡山地区の古民家で野菜をつかって自給している。また、薪ストーブを所有しており、薪を集めることも苦勞しているという。

【世帯E】：2009年ごろに移住。以前から田舎暮らしに関する雑誌を購読しており、都市部での生活から抜け出したいという思いが強かったという。

【世帯F】：高校卒業後進学を機に東京都から長野県へと移住。卒業後は福祉施設に勤務しながらそこにあった焼き釜を使って陶芸を本格的に開始した。2004年に独立しそれを機に空き家を探して入居した。ここを拠点として陶芸教室を開き、自身の作品を展覧会に出品したりなどの活動をしている。世帯Fについては、独立して個人で陶芸教室や作家活動を行い、煙突から煙が出るため、他の民家がない場所を移住先の空き家の条件としていた。その中で条件に適した瑞穂地区の空き家が

見つかり、移住した後に増改築を行い、作業場を設け、窯を設置した。

【世帯G】：もとは常盤地区の出身で会社勤めのころは千葉県に土地付き住宅を購入していた。しかし古民家へのあこがれが強く、定年退職前に瑞穂地区にある古民家を購入した。

【世帯H】：長野市から進学を機に上京し、デザイン関係の仕事をしていましたが、不景気で業績が落ち込み、長野県への帰郷を決意した。農業にも関心があり、岡山地区の集落へ移住した。妻と娘と3人で移住して、それぞれ市内で仕事をしている。個人で農業を行いたいという希望があり、当初は故郷の長野市松代町で探したが価格により断念、その後岡山地区の田畑付きの現在の住居を購入した。

【世帯I】：1年前に東京都より転居。幼いころ住んでいた仙台で野山を駆け巡ったり土いじりをするのが好きだったが、東京ではそれができず生き生きと生活したいという気持ちが強まっていったという。公務員を退職する直前からNPOふるさと回帰センターに行き、飯山市の体験会を知り何度か参加した。その後飯山市岡山地区で売りに出されていた現在の住居を購入し、夫と夫の母親、娘2人を都内に残し一人移り住んだ。リフォームを行い生活、嘱託の事務職員として働いている。

【世帯J】：大学卒業後、メーカーの仕事をしていましたが、料理人として修業をはじめ、その後2011年に中野市にある妻の実家近くに移住しホテルで料理人として勤務していた。その後2014年に飯山市柳原地区にある古民家を購入しリフォームを行い、翌2015年に懐石料理店をオープンした。料理店を個人で開業する希望があったため、希望する住居は四季の移り変わりや景観など強いこだわりがあった。その中で地元の人を介して現在の住居を紹介してもらい、季節ごとに見学に来て、迷った末にこの民家への移住及び料理店の開業を決断することになった。

【世帯K】：大学卒業後、都内のスポーツ用品店に勤めたのちに、求人情報誌で飯山市岡山地区にある体験宿泊施設の広告を見て移住を考えた。学

生時代から登山などで自然地域を巡る趣味もあったことから2014年8月に飯山へ移住した。施設近くの集落にある空き家がこの施設の寮として借り上げられており、従業員数名がこの集落の空き家で暮らしているという。

【世帯L】：写真撮影の仕事をしており、移住以前は神奈川県に在住していた。岡山地区の体験宿泊施設の開業3年後である2000年ごろに仕事で訪れて以降、施設の従業員であった人物と親交を深め、2010年ごろに別荘として岡山地区の空き家を借り、冬季の写真撮影の拠点としていた。2014年ごろに別の集落の空き家を購入して妻と3人の子どもとともに移住した。山での風景などに関心があり、特に日本海側のブナ林に関心が強いという。飯山市は日本海側に近く、岡山地区を中心とした市内山間部は植生が類似しているという。

【世帯M】：関西地方の大学卒業後、名古屋、東京での生活を経て2010年ごろ飯山市へ移住。外国人観光に関心が高く、留学生関係やインバウンドの旅行関係の仕事をしていた。農水省の地域おこし協力隊のサイトで体験宿泊施設の求人を知り、飯山市へ移住した。岡山地区内で一度転居している。

【まとめ】飯山市へ移住した人の特徴は移住意思に着目すると次のように分けていくことができる。一つは、自然での暮らしに憧れて都市部から移り住むという「余暇満喫」型の形態である。移住者はみな、都市部での環境より自然豊かな環境を求めているという傾向が見られ、冬季の積雪に魅力を感じているという意見も聞き取りの中であった。なかには都市部での生活が苦に感じることも移住を決める理由になったという人もいた。昆虫採取や山菜・キノコ採り、登山などといった山間部での活動の拠点とする意味合いでの移住も含まれる。もう一つは仕事の関係で飯山市へ移住した「就業移住」型の形態である。関心があり求めた仕事先が飯山であったことから、そこで生活の軸を据えて居住している形となっている。さらに、この特徴を併せ持った特性も見受けられる。世帯F、世帯J、世帯Lについては、自然へのあ

こがれもありなおかつその環境の下で事業を始めたい希望があったので「独立事業」型の特性があるといえる。世帯F、世帯Jについては移住してから独立する拠点を探していた状況であり、世帯Lについては仕事でその地域に通い続けて魅力を感じて、そこを仕事・生活の拠点とした経緯がある。

以上のように、移住の意思決定には多様な要因があり、余暇や仕事、独立などの要因が主要なものとなるといえる。また、副次的な要因で家族の事情や住宅購入の費用などといった経費も関係する場合もある。

IV 移住者と地域住民からなる地域社会の可能性と課題

IV-1 移住者と地域とのかかわり

Ⅲ章では、移住者の意思決定要因について検討してきた。こうした移住者は移住先の集落の中でどのようなかかわりを持っているのか。今回聞き取りを行った人の多くは、移住先の集落で自治会などの活動に参加し、移住先の既存住民と関わりを持っている。第2表では、移住者がどのような形で移住先の集落及び住民と関わっているのか聞き取りで得られた内容を示している。例えば、自治会については、会議などの集まりに加えて、農協での集まり、PTA・子供会、地域の安全協会という集まりに参加する場合がある。また、具体的な労務活動を集落内で行うこともあり、消防団の訓練、畦道・農道などの整備・清掃活動、祭礼行事での作業などがある。このような活動を通じて移住者と集落の地域住民は交流を深めていく。なかには移住者がその移住先の集落において責任者を務める例もある。

他にも身近な近所づきあいとして、移住先の住宅補修に使用する資材を近くの住民から譲り受けたり、補修作業を手伝ってもらうなどの支援を受けている人もいる。農作業関係では作物の栽培法や保存法を教え受けたりする場合もある。中には以前の持ち主から農機具を譲り受け、その使い方

第2表 移住者と地域のかかわり

世帯記号	地域とのかかわり
A	移住先の地区において区長や民生委員を務める
B	小学校の行事参加がきっかけで地域住民と交流をもつ
C	消防団や畦道の掃除を行う 野菜や果物の育て方や保存法などを教えてもらう
D	近所から農作物をもらうなどの交流
E	移住者同士が交流する会を組織 年数回の交流会を実施
F	地区で水路の清掃を行う PTA や安全協会にも参加
G	移住先の地区での交流あり また、農協関係でも交流あり
H	冬季の勤め先からリフォームに使う資材をもらう 前住人から農機具を譲り受ける
I	近所の農家との交流 区の集まりで他の移住者と知り合う
J	消防団や用水路の整備（年2回）に参加 子供会の役
K	隣の家に風呂を借りたりしている 近所の大工の協力で水道工事費を抑える
L	地元地区の会議や消防団の訓練に参加 側溝掃除や祭礼行事にも参加
M	移住先の地区の会議に参加 2か月に一度の労務活動に参加

（聞き取り調査により作成）

も教え受けて活用している人もいた。このような身近な交流が移住者の暮らしに弾みをつけて生活に対する満足感を得ていくことができるといえる。

また、世帯Fでは移住者同士のコミュニティを作り、年に一度の総会と複数回の交流会を実施している。移住者同士の交流及び情報交換などがなされていて、こうしたつながりも広がりつつあ

る。さらに、空き家への移住者の多くは写真3に示すような薪ストーブを購入して冬季の暖房に備えている人が多い。使用する薪を移住者同士のコミュニティのメンバーが共同で購入する場合もあるという。

Ⅳ-2 移住者がもたらす可能性と地域社会への関与における課題

では、こうした移住者が地域にもたらす可能性と地域社会で関わるうえでの課題は何であろうか。

地域社会にもたらす可能性としては、高齢化が進行し、人口が減少する農山村地域において、コミュニティ維持の役割があるといえる。今回聞き取りを行った移住者のなかには、30代から50代の家族もおり、高齢者の多い既存住民にとっても良い刺激となるといえる。また、都市部で生活していた視点から、地域のコミュニティの在り方について提言していくことができる。さらには、地域社会の新たなリーダーとして活躍していくことも



写真3 薪ストーブ

（2016年5月 富田撮影）

考えられる。特に世帯Aは、移住先の集落で区長を務め、また民生委員としてもその移住した集落や岡山地区を超えた範囲で活動を行っている。こうした移住者が地域づくりの先駆者として活動していくケースも今後多くなっていく可能性もある。

一方で、移住者が地域社会にかかってくる課題も存在する。まずは、移住にかかる費用についてである。移住に対して住宅を購入しても入居後の改修に多額の費用が生じる場合がある。移住者のこだわりもあるが1000万円を超す費用が生じた人もみられた。経済的な負担も大きく、行政の補助金に加えて移住先の地域でサポートする体制も重要になってくるといえる。

もう一つは、移住先の地域社会で生活する場合において発生する費用「区費」である。農山村地域においては都市部より費用が高くなる傾向にあり、集落によって徴収額や徴収する名目が異なる。地区内の行事ごとに費用が徴収される場合もある。こうした地域の労務活動や行事に参加しない場合、「出不足料」とよばれる費用を払う必要が生じることがある。この「出不足料」制度の導入状況は集落によって異なるが、移住者の意思や地域へのかかわりに影響をもたらす可能性もある。現在導入されていない集落でも今後の導入を検討しているケースもあった。移住者が既存の地域社会に入りやすいか否かについてはそこでの取り決めが大きなカギとなる可能性もある。既存住民側にとっては当たり前払い続けたものであるが、都市部で生活を続けてきた移住者にとってはこれまでなかったものである。既存住民はこうした点に理解を示す必要がある。区費は地域社会を維持していくために必要な経費であるので、移住者側も一定の理解を示し、お互い協力し合う意志を持ち続けられるようにしていくことが不可欠である。

V おわりに

本稿では、長野県飯山市を事例として空き家発生の現状とその要因について概観し、その上で山間部を中心に空き家への移住者の地域へのかかわ

りや生活での課題について考察した。飯山市では市内の中心部や山間部で空き家の発生が目立っている状況となっており、一人暮らしの高齢者が亡くなったり、家を出た子どもが、自分たちの暮らす都市部に親を引き取ることで住居が空き家となることが多い。

今回聞き取りを行った飯山市への移住者は、自然豊かな環境の中での暮らしにあこがれた「余暇満喫」型や、仕事の関係で飯山市の農山村地域に移住した「就業移住」型、さらには自ら事業を立ち上げる「独立事業」型と移住要因別にとらえられることが分かった。飯山市という地域において、単に都市部から農山村へ憧れを持って移住するというだけでなく、その環境の下で就業する場があること、あるいは自らの意思で開業するという発想を持つ移住者がいることは近年に見られる傾向であり、ライフスタイルが多様化しつつあることを示しているといえる。また彼らは、地域の労務活動に参加したり、近所づきあいなどで地元住民とも関わりを強めている。少子高齢化が進行している地域において地域づくりの新たな担い手となっており、その活躍が期待されている。移住先で移住者同士がかかわりを持ったり、移住者が地域社会で責任者となるケースもみられたので、移住者が農山村地域の社会を変容させていく主体となりうるということが指摘できる。

こうした現状には、行政による空き家バンクや移住に関するセミナーなどの取り組みにより岡山地区を中心とした山間地域において移住者が増加しつつあることが一つの要因といえる。行政による移住者をねらった取り組みが功を奏し、多様な特性をもった人が移住することで地域活性化につながっていくことが新たな動向としてとらえることができるのではないだろうか。その一方で、移住者の住宅改修や地域社会で関わっていくうえで発生する「区費」や「出不足料」といった都市部ではみられない出費も発生することがあり、こうした慣習への理解が移住者側の課題であるといえる。移住者と既存住民が互いの価値観を尊重し、協働して地域を担っていくことが必要であるといえる。

本研究の調査に際しまして、飯山市移住定住課、各地区活性化センター、そして多くの移住者の方々には多大なるご協力をいただきました。記して御礼申し上げます。

[文 献]

- 岩見基史・植田宏・持田美沙子（2015）：中山間地域における空き家の実態とその活用に関する研究。日本建築学会九州支部研究報告，**54**，297-300。
- 川口太郎（2016）：空き家考。駿台史学，**157**，87-114。
- 北山幸子・橋本貴彦・上園昌武・関耕平（2010）：島根県3地域（海士町，美郷町，江津市）におけるU・Iターン者アンケート調査の検討。山陰研究，**3**，37-66
- 新里維斗・武田美恵（2015）：石垣島におけるIターン者と地元住民との関係性から見た定住に関する考察－崎枝・川平・野底を事例として－。日本建築学会東海支部研究報告書，**53**，465-468
- 竹下聡美（2006）：屋久島へのIターン移住における仲介不動産業者の役割。人文地理，58-5，43-55。
- 谷川典大（2004）：大隅諸島への移住者とコミュニティ－ショート・ライフヒストリーと「語り」－。人文地理，56-4，63-79。
- 西山弘泰・久保倫子（2015）：産・学・民による空き家解消への取り組み－宇都宮市を事例に－。地理，60-2，84-93。
- 原田典子（2007）：小規模・家庭オフィス（SOHO）創業者のライフパス分析－甲府市及び周辺地域の事例－。地域研究年報，**29**，21-28。
- 牧野知弘（2014）：空き家問題－1000万戸の衝撃。祥伝社
- 益田理広・久保倫子（2015）：空き家問題の空間論的考察－都市の空き家問題解決への道筋を求めて－。地理，60-7，70-78。
- 山岡淳・藤岡秀英・貴志匡博・中川聡史（2011）：多自然地域における逆流人口移動の現状と課題－神戸大学経済学研究科と兵庫県多可町の協力協定にもとづく調査研究より－。国民経済雑誌，203-3，39-56。
- 由井義道・杉谷真理子・久保倫子（2014）：地方都市の郊外住宅団地における空き家の発生－呉市昭和地区の事例－。都市地理学，**9**，69-76
- 米山秀隆（2012）：空き家急増の真実 放置・倒壊・限界マンション化を防げ。日本経済新聞出版社

